

# そこに 学校があった。 休廃校の歴史

## 興津小学校 (下)

平成以降に休廃校になった学校を中心に振り返ります。

### 防災の興津小がスタート

1946(昭和21)年12月21日午前4時19分に発生した昭和南海地震による高知県内の被害は甚大で、県東部や須崎、中村などは壊滅的な被害が出た。興津でも半壊や屋根瓦が落ちてしまった家屋が多数出た。当時のことを記憶されている方が興味深いことを教えてくれた。「東向きの家は無事で、南向きの家の瓦が落ちていた」というのである。揺れの向きによって建物の被害に差が出るということは、あの阪神淡路大震災でも起こったことである。



創立から102年。児童たちで人文字。プールはこの12年後にできる

その昭和南海地震から59年後の2005年。文部科学省から防災教育推進の地域指定を受けた。その時校長は「防災は学校だけの課題ではない。やるなら地域ぐるみだ!そして、一過性の取り組みでは意味がない。災害は、今かもしれないし、数十年後かもしれない。でも必ず来る。だからこそ長続きさせねばならない」そう決意した。

### 車の両輪のように

早速、地域に呼びかけた。初めは「地震が来たら来た時のこと」と半ば諦めムードだった高齢者たちだったが「生き延びんと復興ができません。死んだらいかんぞ」という言葉を聞き、目の色が変わり始める。そこからだった。学校・地域が一体となって活動が進んだ。当時の校長は言う。「当初から学校と地域の代表が車の両輪のように連携しながら取り組めたことが

大きかった」と。

文部科学省の指定期間が終わってからも、その活動の勢いは続く。「町が予算をつけてくれたことも大きかった」と言うように、学校・地域だけでなく、行政も加わった。さらに、大学などの研究機関の参加も力になった。そして何より子どもたちの意欲と活発さが活動を支えた。



児童、保護者、地域住民も含め総勢87名が参加した先進地視察。「興津の防災」はここから始まった

### 行政を動かした「子ども目線」

活動の象徴とも言える防災マップ作りは毎年テーマを持って取り組み、その都度何らかの賞を受賞した。制作の過程では、子どもたちが主体となることが大切にされた。子どもたちが地域内を歩いて気づいたことをマップに活かすのである。ある年のマップ作りで、町指定の避難所をチェックして回った時、高齢者などが行きにくい所があることに子どもたちが気づいた。そのことを機に避難場所の再整備が急速に進んだという。子ども目線が行政を動かしたのである。

阪神淡路大震災後に兵庫県が開催している「ぼうさい甲子園」で、複数回の受賞を果たしていることは特筆すべきことで、そのことに光があたる。しかし、それだけではない。膨大とも言える取り組みの数々、その全てが興津地区の宝と言えよう。さらに児童たちにとっては、防災のみならず、興津ならではの自然環境の中で活動したことの、あれもこれもが宝物である。



担架づくりは運動会の種目にもなった



防災標語看板の制作・設置

安政初期に全国で起きた震災を見聞した後、この地の近代児童教育の始まりを担った初代校長・浜崎蔵六は、百数十年後の児童たちの活躍ぶりに目を細めているに違いない。

2024年3月、興津小学校の歴史はその幕を閉じた。そこにはいつも子どもたちがいた。そこに学校があった。(おわり)

#### 町のうごき

| (10月31日) | 人       | 口   | 前月比 | 出生        | 死亡     | 転入 | 転出 |
|----------|---------|-----|-----|-----------|--------|----|----|
| 男        | 7,024   | -14 |     | 男 1       | 13     | 12 | 14 |
| 女        | 7,564   | -20 |     | 女 3       | 16     | 7  | 14 |
| 計        | 14,588  | -34 |     | 計 4       | 29     | 19 | 28 |
| 世帯数      | 7,852   | -18 |     | (10月中の届出) |        |    |    |
| 窪川地域     | 10,412人 |     |     | 大正地域      | 2,014人 |    |    |
|          |         |     |     | 十和地域      | 2,162人 |    |    |